

斧の歌 佐佐木定綱

『寺山修司 母の歌、斧の歌、そして父の歌 鑑賞の試み』(人間社)という本が出た。

寺山修司の短歌鑑賞ではあるが、普通の短歌鑑賞本とは少し違っている。まず取り上げられている歌が「母の歌」五十首、「斧の歌」十首、「父の歌」三十八首となっている。テーマで分けられることはよくあるが、三種類のみでこの分け方というのは珍しい。

さらに鑑賞者は一人ではない。発起人の伊藤祐作、ドキュメンタリー映画監督の青池憲司、役者・演出家の流山児祥、詩人の大橋信雅、歌人の藤原龍一郎、という五人が行っている。

全員が全首に鑑賞を寄せているわけではない。伊藤はすべての歌に鑑賞を行っているが、大橋と藤原は一部の歌のみに鑑賞を寄せている。青池憲司と流山児祥は一首単位ではなく、まとめての評論を寄せている。

つまりは程度の差はあれ、五人分の鑑賞を味わえる本というわけだ。

例えば次の歌。

・老犬の血のなかにさえアフリカはめざめつつありおはよう、母よ

伊藤は「母のパートナーの中を流れるアフリカ大陸の血のことをこう詠んでいるのだろう。母と、そしてそのパートナーとなっ

た男への寺山少年の複雑な心の揺れが感じられる」と母親の交際相手を見る。藤原は「アフリカは何の比喩なのだろうか。普通に想像すれば野生の血ということか。(中略) 結句の「母よ」という呼びかけは、自分の中にも母離れの野生の血が目ざめ始めることへの静かなる告知ではないだろうか」として野生性を見る。流山児は「アフリカ」などの「メタファー」が「母」の存在に収斂してゆく不条理劇」を見る。三者とも「母」の重要性という認識は共通しつつも、違ったドラマを読み取っているようだ。この歌に限らず伊藤の読みは自身の中での飛躍が多く、論拠の提示が欲しい部分があった。

もう一点特筆すべきはやはり「斧の歌」だろう。「下北半島は斧の形をしている」という寺山の言葉と、伊藤が「斧という字」を「父斥ける」と読み違えたことから「父殺し」のテーマがあるのではと発想し「斧の歌」を集めたという。

・なまぐさき血縁絶たん日あたりにさかさかさに立ててある冬の斧
私も好きな歌だが、伊藤はこれを「父への殺意が全面に出た歌」とする。

・さむきわが射程のなかにさだまりし屋根の雀は母かもしれぬ
この歌のように寺山の「母殺し」は頻出するテーマだが、「父殺し」は珍しい。なかなかぶつ飛んだ読みだとは思いますが、新たな試みとして興味深く読んだ。確かに「チェホフ祭」で歌われたのは「亡き父」であった。

それにしても何故いま寺山修司なのかと思ったら没後四十周年記念ということらしい。残すということとはつねに新しい視座で歌を再構築していくことでもある。それを考えさせられた。